

西南学院大学博物館所蔵 《聖母への奉納画》

西山 萌

【資料データ】

《聖母への奉納画》

Ex-voto to Virgin

メキシコ / 20-21世紀 / 金属製、着色 / 23.0×28.0cm



ESTABA UNA
CALACA ENAMOR
ADA DE MI
HIJA LUISA
PERO CON LA
AIIUDA DE LA VIRGEN Y UNA
ESCOBA NO VOLVIO A MOLESTAR
GRACIAS

Estaba una Calaca enamorada de mi hija Luisa
pero con la aiiuda(ayuda) de la virgen y una
escoba no volvio a molestar gracias

カラカが私の娘ルイサに恋していました。しかし、聖母とほうきの助けによって、もう悩まされません。感謝します。

解題

メキシコは人口の大多数がカトリックで、敬虔な信者が多い国として知られる。地方の小さな集落にも教会堂があり、その内部では、イエス・キリスト、聖母マリア、諸聖人の像がたたずんでいる。聖像の周囲には信者によって奉納された品々が飾られている。メキシコでは、感謝のしるしとして教会に奉納するという風習がある。そのなかのひとつにブリキの板に描かれた絵がある。現地ではこれを奉納画と呼び、そこにはイエス・キリスト、聖母マリア、諸聖人とともに彼らの執り成しによって叶えられた出来事、そして感謝の言葉が書きこまれる。キリスト教に関連した資料を収集する西南学院大学博物館では、メキシコの奉納画を所蔵している¹。本稿で紹介する《聖母への奉納画》もそのうちのひとつである。

本稿では、資料の紹介をするにあたって、まずは奉納画の起源とメキシコにおける奉納画の歴史的背景について概観していく。

【奉納画の起源】

病気や事故をはじめとする何らかの危機的状況に遭遇した際、人々は聖人や聖母に対して祈った。そして、彼らの執り成しによって願いが成就したならば、治癒した身体の部分をかたどった金属の打ち抜きや蠟細工、木の板などに祈願内容を図像化したものなどを、誓願した聖人や聖母に由来する教会に奉納した²。この習慣はヨーロッパや中南米などカトリック世界で広く見られる。

神にものを奉納する習慣は、新石器時代に遡り、エジプトやメソポタミアでも人物像の奉納があった。身体の部位を奉納することは、古代ギリシャに始まる。エーゲ海のマルタ島からは粘土や石灰でつくられた目、耳、手足など身体の部位を表した奉納品が出土している。さらに、紀元前5世紀に確立した医神アスクレピオス崇拜においても、身体の一部を模した金属製の奉納物が捧げられていた³。これらの奉納物は現在でも、粘土や金属だけではなく蠟

細工という形態で、カトリック世界の各地に同様の伝統をみることができる。

奉納品のもうひとつの形態として、祈願内容を図像化したものがある。正確な起源は不明だが、この形態はキリスト教がヨーロッパに浸透して以降のものと考えられ、17世紀中頃にはすでに感謝のしるしとして習慣化していた⁴。奉納画は日本の絵馬と似ているが、事前に願を掛ける絵馬と異なり、奇蹟的な力によって救ってくれた神や聖母や聖人への感謝の証である。すなわち、絵馬が今後のことを祈願して奉納するのに対し、奉納画は過去に起こったことに感謝して奉納するものである。

これらの奉納品は教会の内外に貴賤を問わず奉納された。奉納の習慣は中南米でも大いに隆盛した。メキシコには、スペインによってキリスト教とともに伝えられたのである。

【メキシコへのキリスト教伝来】

15世紀末の大航海時代、ポルトガルとスペインはほかに先駆けて世界の海に乗り出し、1492年コロンブスが新大陸に到達したのを機に、アメリカ大陸へ進出した。現在のメキシコに相当する地域にスペイン人エルナン・コルテスが軍を率いて上陸したのは、1519年のことである。当時、その地域の覇権を握っていたのはアステカ帝国であった。コルテス軍はアステカ帝国の首都テノチティトランを目指し進軍した。1521年8月13日、コルテス軍は激しい攻防戦の末にアステカ帝国を滅ぼした。こうして獲得された領域はヌエバ・エスパーニャ(新スペイン)と名づけられた。コルテスはテノチティトランの廃墟の上に首都メキシコシティの建設を命じた。町の中心をなす中央広場と大聖堂は、テノチティトランの心臓部であった大神殿跡に建設された。

新大陸の征服活動は、武力による征服であると同時にキリスト教による精神の征服でもあった。先住民のキリスト教(カトリック)化はスペイン国王が新大陸を征服するにあたってローマ法王庁より課せられた責務であった。しかしキリスト教の布教は、単に国王たちが負った義務として実行されたのではな

かった。イサベル1世とフェルナンド2世が「カトリック両王」と呼ばれるように、スペインの国王たちは信仰心の篤いキリスト教徒でもあった。また征服者たちの多くも篤い信仰心に支えられていた。

新大陸の征服にスペイン人を駆り立てたのは黄金への欲であったが、同時にキリスト教を伝道するという信仰への情熱が彼らにあった。遠征する探検隊には、従軍司祭とも呼ぶべき宣教師が参加していた。ヌエバ・エスパーニャに到来した最初の聖職者は、コルテスの遠征隊に随行した3名の従軍司祭たちであった。やがて1523年にフランシスコ会がヌエバ・エスパーニャで最初の組織的な布教活動を開始した。1526年にはドミニコ会が南部のオアハカを中心に活動を開始した。1533年にはアウグスティヌス会が参入した。これら3つの修道会は、16世紀前半のメキシコにキリスト教を布教する先鋒でもあった。植民地時代を通じて辺境の地に入り、また広く教育に業績を残したイエズス会がヌエバ・エスパーニャに到着したのは1572年である。

初期の布教活動はしばしば強引に実施された。征服期に、一日に数十人あるいは数百人という単位で洗礼を受けさせられたことはその典型的な例である。また、スペイン人たちは各地で先住民の神殿や偶像を徹底的に破壊した。

少ない宣教師で広大な地域に効率よく布教するために、各修道会はまず、先住民を集めて新しい集落を建設することから始めた。宣教師たちが目指したのは、西欧型の集落を造ることであった⁵。村の中心には修道院が建設され、宣教師が2～3人ずつ常駐した。周辺の小集落には、宣教師が巡回して布教にあたった。16世紀半ばまでに、ヌエバ・エスパーニャでは160の修道院が建設され、約800人の宣教師が布教活動に従事していた⁶。先住民を改宗させるためにも、宣教師たちは彼らの言語や宗教、慣習などを学び、彼らを理解しようと努めた。また、彼らはキリスト教を先住民が抵抗を感じずに受容できるよう、キリスト教に土着の宗教要素が残存することに対して比較的寛容でもあった。このような宣教師の活動が、広大な地域における迅速な布教につな

がった。さらに、改宗した先住民村には、王権が保証した先の共有地と村会運営の権利が与えられたことも布教拡大を後押しした。

スペインのカトリック教会は300年にわたる植民地時代を通じて植民地統治機構の一部として機能した。これによって植民地支配を行う上で不可欠なイデオロギー的かつ社会的基礎を整備すると同時にヌエバ・エスパーニャの先住民の生き方を変えたのである。

【メキシコの奉納画】

メキシコでは、信者が願い事の成就に感謝して奉納した種々の奉納物を、レタブロ(retablo)と呼んでいる。レタブロという言葉は、もともとラテン語のretaulusに由来し、祭壇の後ろの領域を意味するが、現地では、祭壇背後を飾る奉納物にも当てはめている⁷。それらはひとまとめにレタブロと呼ばれているが、次のように大別することができる。イエス・キリストや聖母、聖人のみを描いた小さな板絵をレタブロ、心臓や手足など人体の一部を模した金属の薄片をミラグロ(milagro)、奇蹟によって救われたことを感謝する言葉を書きこんだ小さな板絵をエクス・ヴォート(ex-voto)、といったものに区別される⁸。

災厄に見舞われ、そこから逃れた者たちが教会に奉納画を納めるのは、それを神や聖人に感謝するためである。こうした画像はそれを奉納する場所柄、第三者に見られることを前提としている。その目的は、奉納者が自分の信仰を告白し、危機を免れたのは神や聖人の恩寵によるものであることを公にすることだ⁹。公の場に掲げることは、奉納者の経験を周囲に広く告知し、後世に永く伝える。こうすることによって奉納者は神あるいは聖人の恩寵を受けた者として、その後の人生も祝福されたものになると考えた。奉納画に記されている出来事のなかには、奇蹟とは言いがたいものもある。骨折や切り傷など安静にしていれば治る怪我もあるのだが、これらも奇蹟による回復となる。聖なる奇蹟がなくとも回復したかもしれないが、そこにあえて神や聖母、聖人

の介在があったと信じることで、自らが彼らに守られていることを確認し、保証しようという心持ち、それが奉納画という習慣の根底にある¹⁰。

奉納画は、小さくカットしたブリキ板にペンキで描いたものが一般的だ。これは、合金技術の発展が奉納画の習慣を拡大する遠因になったからである¹¹。植民地時代から18世紀の終わりまで、奉納画の習慣は、ごく一部の裕福な人々に限られていた。当時、奉納画の基材にはカンヴァスが用いられており、これはヨーロッパから輸入されたもの、あるいはメキシコに移住したスペイン人によって現地で生産されたものだった。非常に高価なものであるため、一般の民衆が手に入れることは困難だった。18世紀の終わり頃、合金技術の発展によってブリキの生産が可能になると、元々、別の目的のためにつくられたブリキ板は、現地の奉納画の画家たちによって安価で容易に入手できる画材として利用されるようになった。薄い鋼板に錫をメッキしたブリキ板の表面は塗料をよく付着させ、カンヴァスや板絵よりも耐久性があり、銅板よりもずっと軽かったことも奉納画に適していた。1830年代には奉納画の画材としてブリキ板が広く普及し定着した。安価で手に入るブリキ板は、それまで一部の裕福な人々に限られていた奉納画の風習を、19世紀半ば頃には民衆の間に拡大させた。特にメキシコ中央西部地域に広がりを見せ、大多数の奉納画が大衆によって奉納されるようになった。

19世紀以降、民衆のための奉納画は無名の画家によってつくられた。メキシコでは、1785年に最初の美術学校が設立されたが¹²、奉納画の画家のほとんどは、必ずしもアカデミックな訓練を受けたわけでもなければ、初めから美術作家をめざしたわけではない者たちだった。彼らによってつくられた奉納画は、素朴とも稚拙とも判じがたい印象を与える。しかし、その技術の欠如が、災厄の場面を描いた奉納画から生々しい凄惨さを排除し、代わりに奉納者の感謝と誠意を画面上に示している。事故や病気、災害などの肉体の苦痛をテーマにした奉納画にとって、過剰な写実は必要とされるものではないのだら

う。そのような曖昧なあるいは一種ゆとりのようなものが奉納画の持つ独特な魅力となっている。

無名の画家による奉納画は、その技量に程度の差こそあるが、画面の構成はほぼ共通している。一般的に画面は以下のような構成になっている。画面の上部では超自然的な存在が雲や玉座あるいは祭壇の上に、炎や光に囲まれて登場している。画面の下半分では、室内か屋外で奉納者や神の加護を求める者が祈禱し、その傍らに奉納の原因が描写される。さらに、最下部では言葉によって状況が説明される。このように奉納画は、最上部が聖人の顕れる聖なる空間すなわち天上世界、中間部が奉納者と奉納の原因となった出来事の地上世界、最下部が聖なる奇蹟のいきさつと奉納者の献辞を記す空間という3つの層から構成される¹³。しかし、20世紀以降、その構図に変化が生じる。奇蹟のいきさつを語る献辞は、画面中央あるいは上部に書きこまれるようになるのである¹⁴。

さらに時代が下ると、奉納画に代わる新たな奉納品が人々によって教会に納められる。災厄の出来事に関連する写真や新聞記事がそのまま額に入れられ、奉納画の代わりとして用いられるようになる¹⁵。その結果、ブリキ板による奉納画は次第に制作されることも、奉納されることもなくなっていくのである。

しかし、ブリキ板を用いた伝統的な奉納画は、20世紀のメキシコを代表する女性画家フリーダ・カーロ(1907-1954)によって再発見される。奉納画の手法はフリーダに大きな影響を与えた。彼女の作品に見られる不思議な個性、すなわち強烈な色彩、不安定な構図、一見稚拙な描法、衝撃的なテーマにもかかわらず無表情につき離れた画面などは奉納画に共通する。フリーダと奉納画の関わりは、1925年、フリーダがバス事故に巻き込まれたことから始まる。その事故は18歳だったフリーダが乗っていたバスと電車が衝突した大事故で、彼女の人生を一変させる大怪我を負わせるものだった。事故の後、フリーダの両親は大怪我を負いながらもかるうじて娘の命が助かったことに感謝して、聖母に奉納画を捧げた¹⁶。療養生活をきっかけにフリーダは絵を描くようにな

り、1932年からは奉納画を範にとったような作品をつくりあげていく。当時、彼女は画集や夫ディエゴ・リベラ(1886-1957)を通じてヨーロッパのあらゆる絵画を知り、美術への造詣は深かった。しかし、事故の後遺症による肉体的苦痛、あるいは恋多き男だったディエゴから裏切られた苦悩を描くとき、フリーダはあえて奉納画の手法を取り入れた。絵具が定着するようあらかじめ下塗りされた小さな金属板を使い、奉納画のような基材とサイズで作品を制作した。小さな金属板に描くことを勧めたのは、ディエゴだった¹⁷。奉納画のコレクターだったディエゴは¹⁸、奉納画の手法を用いれば、フリーダの絵の精神性がさらに深まると考えたのだ¹⁹。フリーダの絵も奉納画も、ともに肉体的苦痛のありさまを詳細かつ率直に描写している。奉納画はフリーダのプリミティブ・スタイルの最も重要な源になった²⁰。フリーダは奉納画を再発見し、メキシコの民衆に伝統的に伝わる奉納画の手法を自らの作品のテーマと版型と様式に凝縮した最初の画家であった。

【西南学院大学博物館所蔵《聖母への奉納画》】

本資料は聖母に捧げられた奉納画である。奇蹟のいきさつと奉納者の感謝の言葉が記された聖母への献辞は、画面の上部に書きこまれている。それは伝統的な奉納画の特徴と異なるが、このような献辞の表記は20世紀以降につくられた奉納画に見られるものであり、したがって、本資料も20世紀以降の奉納画と考えられる。

献辞には、ある母親が自分の娘に言い寄る骸骨を聖母と帚の助けによって退散させたことを感謝する旨が書かれている。感謝を捧げられている聖母は、奉納画の右上に描かれている。その姿は、メキシコで最も信仰を集める「グアダルーペの聖母」に類似している。

「グアダルーペの聖母」は、先住民の前に褐色の肌をした聖母が顕れ、病を治したという奇蹟を起源とする²¹。1531年12月、キリスト教に改宗したばかりの先住民の男ファン・ディエゴがミサに参加するためにメキシコシティ北部のテペヤクの丘を歩いてい

ると、聖母マリアが彼の前に顕れた。聖母はその丘に聖母のための礼拝堂を建立するようメキシコ司教に伝えてほしいと告げた。ファンはいわれたとおりにメキシコ司教スマラガのもとに行き、見聞したことを司教に話したが、司教は俄かには信じなかった。聖母は再度ファンの前に顕れ同じことを告げたが、やはりファンが司教を説得することはできなかった。スマラガ司教から聖母であるという確たる証拠を見せるように言われたファンは、そのことを聖母に伝えた。聖母は明日テペヤクの丘に来れば証拠の品を渡すと答えた。ところが、ファンが家に戻ると、彼の伯父が病に伏し瀕死の状態だったため、翌日は聖母のもとに行くことができなかった。その夜、死を覚悟した伯父から司祭を呼んでくるように頼まれたファンが教会に急ぐ道すがら、彼の前に聖母が顕れた。やむなく事情を話したファンに聖母は伯父が病から快癒すると告げた。ファンが家に戻ったとき、伯父は病から回復していた。聖母に感謝したファンは、聖母の命に従うことを申し出た。聖母は場所柄咲いているはずのない花を彼に与えた。ファンは花をマントにくるみ、司教のもとへ走った。そして、ファンが司教の前でマントを開くと、花を包んでいたマントに黄金色に光り輝く褐色の肌の聖母の像が浮かび上がった。こうして、テペヤクの丘の上には礼拝堂が建てられ、人々の信仰を集めるようになった。

グアダルーペの聖母がどのようにして広く信じられるに至ったのか。聖母のための礼拝堂が建てられたテペヤクの丘は、もともとアステカの母性神トナンツインの神殿があった土地だった。先住民の人々は、テペヤクの丘に顕れた聖母に、かつて信仰した豊穡の女神を見出した。そして最も注目すべきは、ファン・ディエゴの前に顕れた聖母の肌の色が褐色であることだ。聖母の肌の色は聖母が先住民に属することを示していた。グアダルーペの聖母は、メキシコ中央高原の先住民の大地母神への信仰を聖母マリアへのそれにすくい取ったのである²²。カトリック教会は、先住民がキリスト教を受け入れやすいよう、キリスト教に土着の信仰が残存することをある

程度許容した。こうして、グアダルーペの聖母への信仰は、土着の信仰とキリスト教が融合した典型的な例のひとつとなった。

グアダルーペの聖母への信仰は、先住民だけにとどまらなかった。メキシコシティのクリオーリョ(植民地生まれの白人)たちの間でも、グアダルーペの聖母が熱烈に歓迎された。スペイン本国人よりも劣ると見下されたクリオーリョにとって、聖母の顕現譚は、異教の神々によって汚された土地に、神が許しを与え特別な恩寵を約束したことの証であり、征服を敢行した人々(クリオーリョの父祖たち)の功績を称えるものだったからである²³。このように、グアダルーペの聖母への信仰は、民族を問わず、メキシコの人々の間にあまねく広まっていった。

本資料の献辞には、グアダルーペの聖母を指す言葉は書かれていない。しかし、聖母の褐色の肌、胸の前で重ね合わせた両手、光に包まれ、足元に天使を配するたたずまいがグアダルーペの聖母のそれと非常に類似している。本資料の聖母がグアダルーペの聖母であるならば、聖母が帚とともに追い払った骸骨は何を意味するだろう。次に本資料の骸骨を見てみよう。

本資料において楽器を手に踊るような動作を見せる骸骨は、献辞ではカラカ(calaca)という言葉によって記されている。カラカとはメキシコという言葉で頭蓋骨あるいは骸骨を意味する。メキシコでは骸骨を陽気なあるいは滑稽な姿で表現することは珍しいものではなく、このような骸骨はメキシコの祝祭である「死者の日」に登場する。11月1日と2日に祝われる死者の日はメキシコ独特の伝統行事で、この祭りの期間は死者の魂が戻ってくると信じられている。死者を偲ぶ風習はアステカ社会にも存在しており、死者の日はメキシコ土着の死者追悼儀礼とキリスト教の諸聖人の日(万聖節)が融合したものと考えられている。死者の日が近づくとメキシコ各地では、砂糖菓子でつくった骸骨やパン・デ・ムエルト(死者のパン)、センパスチルの花で祭壇を飾りつける。町中を飾り、人々が扮する死者の日の骸骨のイメージは、メキシコ革命前後²⁴に活躍した芸術家たちの

影響によるところが大きい。

19世紀後半から20世紀のメキシコ革命勃発直後までメキシコシティで活躍した版画家ホセ・グアダルーペ・ポサダ(1852-1913)は、当時の民衆向け新聞に、政治問題や社会風刺などの挿絵を手掛けた。彼は絵の中で、あらゆる人間、貴族であろうと聖職者であろうと貧民であろうと着飾った婦人であろうと、また動物であろうとも、すべてのものを骸骨の姿で描き、皮肉った。ポサダは下層階級出身で、正規のアカデミックな美術教育を受けたわけではない。しかし、その分、民衆のひとりとして彼らの喜怒哀楽やさまざまな行事に対して共感し、骸骨のイメージを介して大衆の感じたことを代弁した。それが大衆の支持を受けるとともに、革命後の芸術家たちから大いに評価された。フリーダの夫ディエゴ・リベラが1947年から48年にかけて描いた《日曜日の午後、アラメダ公園を散歩する夢》という題の画面には、19世紀から20世紀初頭のメキシコの歴史上で活躍した有名人が多数登場する。その最前列にはポサダと彼が創造した骸骨の貴婦人が描かれている。ポサダによって、死は骸骨であるというイメージがメキシコの人々の間で定着した。さらに、ポサダに続く芸術家たちによって、骸骨はメキシコ的なものを象徴するシンボルとしてメキシコにおいて不動のものとなった。

本資料における骸骨もまたここでは死を象徴する存在として描かれている。つまり、娘に言い寄る骸骨は娘に死の危険が迫っていたことを表しているのである。本資料の聖母が病を癒した伝説をもつグアダルーペの聖母であり、骸骨が娘の死を象徴するものであるならば、その意味するところは、病気によって死に瀕していた娘が聖なる奇蹟によって回復したことを感謝するものと推測できる。

以上、メキシコにおけるキリスト教と奉納画についてみてきた。16世紀、キリスト教はカトリック大国であるスペインによってメキシコへ伝えられたが、現地の人々は西洋から伝えられたそれをそっくりそのまま受容したわけではない。土着の信仰と融合しながら、メキシコ独自の信仰を確立していった。

本資料の聖母がそのことをよく示している。グアダルーペの聖母はまさにメキシコ特有の聖母への信仰を示す典型的な例である。またメキシコの奉納画は、単なるキリスト教の信仰を示す祈りの道具だけではない。奉納画はフリーダ・カーロによって再発見され、彼女のプリミティブ・アートの源になった。本資料に描かれている骸骨は、メキシコの文化伝統を象徴している。このように奉納画はフォーク・アート(民衆芸術)としての特徴も有している。したがって本資料は、その内容においても、資料の年代や形式においても、メキシコの信仰と習俗がうかがえる重要な資料といえるのである。

註

- 1 西南学院大学博物館では《聖母への奉納画》のほか、以下6点を所蔵している。《聖パスカリスへの奉納画》、《フキラの聖母への奉納画》、《ヴィラセカのキリストへの奉納画》、《サポパンの聖母への奉納画》、《聖フランシスコへの奉納画》、《主への奉納画》。
- 2 岩井洋「民俗／民族宗教としてのエクス・ヴォート」『宗教研究』宗教研究會編、65号、1991年、32-33頁。
- 3 同、33頁。
- 4 宮下規久朗『聖と俗——分断と架橋の美術史』岩波書店、2018年、228頁。
- 5 『メキシコを知るための60章』吉田栄人編、明石書店、2005年、178-179頁。
- 6 国本伊代『メキシコの歴史』新評論、2002年、79頁。
- 7 G. F. Giffords, Mexican Folk Retablos, University of Arizona Press, 1974, pp.2-3
- 8 Giffords, op. cit., p.3
- 9 Art and faith in Mexico : the nineteenth-century retablo tradition, eds.by E. N. C. Zarur and C. M. Lovell, University of New Mexico Press, 2001, p.71
- 10 宮下前掲書、236頁。
- 11 Giffords, op. cit., p.3
- 12 加藤薫『メキシコ壁画運動——リベラ、オロスコ、シケイロス』平凡社、1988年、26-27頁。
- 13 eds.by Zarur and Lovell, op. cit., p.72
- 14 eds.by Zarur and Lovell, op. cit., p.72
- 15 eds.by Zarur and Lovell, op. cit., p.76
- 16 フリーダの両親によって奉納された奉納画には次のような献辞が書かれている。「ギリェルモ・カーロとマティルデ・C・デ・カーロ夫妻は、1925年にクアウテモツィンとカルザーダ・デ・トラルパンの角で起きた事故から娘を救ってくださったことを、悲しみの聖母に感謝します」クリスティーナ・ピュリュス『フリーダ・カーロ——痛みこそ、わが真実』遠藤ゆかり訳、創元社、2008年、15頁。
- 17 ヘイデン・エレラ『フリーダ・カーロ——生涯と芸術』野田隆・有馬郁子訳、晶文社、1988年、154頁。
- 18 上野清士『フリーダ・カーロ——歌い聴いた音楽』新泉社、2007年、152-155頁。
- 19 堀尾真紀子『フリーダ・カーロとディエゴ・リベラ』ランダムハウス講談社、2009年、175頁。
- 20 エレラ前掲書、155頁。
- 21 山崎真次『メキシコ——民族の誇りと闘い』新評論、2004年、90-92頁。
- 22 『現代メキシコを知るための60章』国本伊代編、明石書店、2011年、194-195頁。
- 23 吉田編前掲書、197頁。
- 24 広義には1910-40年、ディアス独裁体制の打倒を目指した民主化運動からカルデナス政権による改革の政治までの政治・経済・社会の変革運動をさす。

